

## 錦絵に描かれた開港場横浜

共立女子大学教授 阿部恒久

### 横浜開港の経緯

1858年7月29日(安政5年6月19日)に調印された日米修好通商条約の第3条にもとづき、開港場として「神奈川」をほぼ1年後に開くことになった。同様の修好通商条約は10月までに蘭・露・英・仏との間でも結ばれた。

開港場「神奈川」について、外国側は東海道の神奈川宿近くでの開港を強く求めるが、幕府は「神奈川には横浜も含まれる」として、横浜に開港場を建設することにした。神奈川宿の近くでは外国人と日本人のトラブルが多発する可能性があること、日本人商人が多数移住してくるため土地が必要なことから、東海道から離れた横浜が適地と考えたのである。

外国側の反対にもかかわらず、幕府は横浜での開港場建設を進め、1859年7月1日(安政6年6月2日)、開港にこぎつけた。開港場のほぼ中央の海岸沿いに運上所(税関)をおき、その左右の地域を外国人居留地域と日本人商人等の居住地域に区画した。開港に合わせて日本人商人等と英・米・仏商人等の横浜への移住・居留が進み、交易が始まった。

### 五雲亭貞秀作『御開港横浜之全図 増補再刻』

開港した横浜は浮世絵・錦絵の格好の画題となり、多くの「横浜絵」が制作された。本図『御開港横浜之全図 増補再刻』もその一つで、浮世絵師・五雲亭貞秀の作品である。彼は1807(文化4)年に下総国布佐で出生。本名は橋本兼次郎。江戸に出て歌川国貞(三代豊国)の門で修業した。その関係で歌川貞秀と名のりすることもある。雅号に「玉蘭」「玉蘭斎」などもある。若いときから頭角を現し、多くの版本類の挿絵制作で活躍し、当時を代表する絵師となった。その後、富士登山を契機に富士山をはじめとする鳥瞰的な風景画を制作する。詳細な描写も特徴で、本図もその一つである。

原刻の『御開港横浜之全図』は開港翌年1860年

の作で、『御開港横浜之全図 増補再刻』は1866(慶応2)年ごろの作と推定される。貞秀が増補再刻版を制作したのは、この間に横浜の急速な発展があったからである。なお、絵の下手に描かれた生麦村・子安村の方から、外国船が停留する海越しに開港場の横浜を鳥瞰し、右下の神奈川宿を経て東海道から横浜に至る道筋も描かれ、遠くには富士山も見えるが、この構図は変わっていない。

### 横浜発展の様相

本図では、開港場のほぼ正面にある運上所をはさむ形で波止場が2本あり、向かって左の外国人居留地にも2本の波止場がある(こちらは原刻にはない)。右が日本人町である。開港場の正面に停泊中の外国帆船には国籍が記されている。それは英4、米3、蘭2、露1、仏1隻である。このほか、日の丸をつけた帆船が2隻、国籍無記名の帆船が数隻いる。

渡来する外国人の増加により居留地の拡張がはかられた。堀割の内で2本の煙が立ち上っている地域(=旧横浜新田、のちの中華街)が新たに居留地となった地で、また堀割の外で2本の煙が上がっている製鉄所も開港場の拡張を示すものであった。さらに堀割の外の山手への居留地進出も幕府に交渉中であった。なお、1866年、居留地は大火にみまわれる。このため、復興再建後の横浜の様相は、本図と多少異なることになる。

横浜に早速進出したのは中国貿易で巨利を得ていたイギリスのジャーディン・マセソン商会とデント商会であった。日本で良質の生糸が入手できることが知れると、欧米の中小商人が横浜に続々と渡来し、生糸貿易に参入した。生糸はたちまち日本輸出品の第1位をしめるようになった。第2位は茶であるが、輸出総額にしめる生糸の割合は半ばをこえ他を圧倒した。こうして横浜での交易は生糸輸出を核に発展し、日本最大の貿易港として、欧米文化が息づく国際都市として発展した。